韓国・外羅老島の日本人移住漁村の居住空間構成とその変容

SPATIAL FORMATION AND TRANSFORMATION OF HOUSES IN JAPANESE MIGRANT FISHING VILLAGE COLONY IN OENARO-DO, KOREA

朴 重 信*, 金 泰 永**, 李 勲***, 布野修司****

Chungshin PARK, Taiyoung KIM, Hoon YI
and Shuji FUNO

This paper aims to clarify spatial formation and transformation of Japanese migrant fishing village the colonial period of Korea in Oenaro-do Island. The fishing village in Oenaro-do is shaped in the unique topographical structure, where river meets the sea at right angle. Consequently, the village was formed into "L" shape. The web of road is composed of three basic types of street, present coastal street, inner old coastal street parallel to the present one and perpendicular alley connecting these two roads together. According to these street pattern, plots of land in the block are formed into distinctive trapezoidal shape.

Taking notice of spans in the width of building, it can be classified into one bay type, two bay type and, multiple bay type. Typical model are one bay type and two bay type. Generally, one bay type and two bay type have rectangular spatial configuration simply composed of shop, kitchen and residence respectively.

Due to narrow frontage, transformation can be observed in the unification of building which can be classified into horizontal (depth) and vertical (width) unification. Horizontal unification is achieved by combination of two buildings in the row which use the same partition wall, while vertical unification is attained by combination of narrow width of two buildings in each rear wall.

Keywords: Japanese migrant fishing village, (Nissiki Jutaku), Japanese Style House, Spatial Formation, Transformation, Oenaro-do
日本人移住漁村、日式住宅、空間構成、変容、外羅老島

1. はじめに

1-1 研究の目的と意義

本稿は、「日本植民地期における韓国の日本人移住漁村の形成と変容に関する研究」^{*1}の一環として、外羅老島の日本人移住漁村を対象とし、居住空間構成とその変容について考察することを目的とする。

前稿では、日本人の韓国移住の背景とその形成過程を考察し、巨文島の巨文港を取り上げ、その形成過程と空間構成を明らかにした上で^{*2}、日式住宅の空間構成と変容について考察した^{*3}。

1903年から始まった日本人の外羅老島への移住に関する文献は、他の漁村と比べると非常に少ない。主要な参考文献は末尾に示す通りである^{*4}。また、日本人移住漁村と日式住宅に関する文献は、前稿にまとめる通りである^{*5}。

外羅老島の日本人移住漁村は次のような特徴を持っている。

①川と海が直交して接する河口及び海岸線沿いに町並みが構成されており、町並み沿いの住宅は1～2階建てである。

②当時本町通と呼ばれた道路が存在しており、旧本町通り沿いの街区には台形をベースとした短冊型の敷地が多い。

③道路の裏側の街区は自然地形に合わせた階段式居住地である。

現在、旧本町通沿いの日式住宅は部分的に改造されたものが多いが、道路の幅、町並みなど居住地の構成は当時の状態のままである。

それ故、本稿では旧本町通沿いの短冊型の住宅を対象とし、居住空間構成と解放後のその変容特性に焦点を当てる。これらを解明することによって、日韓両国の居住文化の比較と居住文化の地域性を解明するに当って重要な手がかりが得られる。

1-2 調査概要

本稿は四次にわたる現地調査を基にしている。第1次調査(2004年2月22日)では、現状確認と写真撮影を行い、第2次調査(2004年6月17日)では、地籍図、航空写真、地形図などの資料収集を行うとともに集落の変遷過程に関するヒアリング調査を行った。第3次調査(2004年6月28日)では、前2回の調査を踏まえた上で島の全域の住居分布と建築類型の悉皆調査を行い、旧本町通沿いの住宅を調査対象として選定した。第4次調査(2004年7月5日～8日)では、選定した住宅の実測調査を行った。実測の内容としては、まず旧本町通り沿い^{*6}の住宅の88棟^{*7}を対象として建物外周とエレベーションを実測した上でその内55棟の間取りを調査した。さらに55棟の中で代表的な事例を14棟選び、平面、立面、断面を詳細に実測した^{*8}。

図1 外羅老島の位置

* 京都大学大学院工学研究科 工博

** 韓国清州大学建築工学部建築学専攻 教授・工博

*** 韓国忠北大学建築学科 教授・工博

**** 滋賀県立大学大学院環境科学研究科 教授・工博

Dept. of Architecture and Architectural Engineering, Kyoto University, Dr. Eng.
Prof., Dept. of Architecture and Environmental Design, Cheongju University, Dr. Eng.

Prof., Dept. of Architectural Design, Chungbuk University, Dr. Eng.

Prof., Graduate School of Environmental Science, The University of Shiga Prefecture, Dr. Eng.

図2 外羅老島の施設分布と1930年代の集落

外羅老島全体の構成概要は図2に示す通りである。調査対象住宅は表1及び図4に示す。

2. 外羅老島の日本人移住漁村

2-1 外羅老島の概要

羅老島は韓半島の南端に位置し、内羅老島と外羅老島の2つの島で構成されている。本来この地域は蓬萊(ボンレ)^{*9}と言い、朝鮮時代の記録をみると当時道陽牧場の属場^{*10}であった。一方、羅老島という地名の語源を探してみると次のようである。羅老島(ナロド)は朝鮮時代に国に馬を提供する島である意味で国島(クックド)と記され、これを韓国語で発音すると「ナラソム」もしくは「ナラド」という。これを日本人が移住してこの発音を漢字に表記する際に「羅老島」^{*11}とした。

現在、韓国南海の主要漁港の一つであり、1966年には漁業前進基地^{*12}として指定されている。典型的な主漁従農村として、主要産物は海老などの甲殻類、鰻・鯛・鯉・太刀魚などの魚類、海苔、若芽などの海藻類であり、釜山、麗水、木浦、巨文島、済州島をつなぐ海運の要衝でもある。調査対象地区である築亭(チュクジョン)1・2区は2つの小さい島に囲まれており、避難港としても適しており、天然の良港となっている。また、当時から製氷工場と製網工場、造船所が位置し、韓国で2番目に大きい缶詰工場もあった。現在でも羅老島の特産物であるサワラ波市^{*13}が全国的に有名である。

2-2 外羅老島の漁村集落の立地と地形

日本人移住漁村を立地別に区分すると、湾型、前島型、河川型の3つに分けられる^{*14}。湾型は天然の湾に形成される集落であり、前島型は海岸に隣接して島があって、その間に形成された集落である。そして、河川型は海

表1 調査対象の概要

記号	番地	建築年代	用途	間口(m)	奥行(m)	構造階数	建築面積(m ²)
S01	1073	1957	娯楽室/住宅	11.90	12.36	W/1	97.89
S02	1069-1	1992	専用住宅	8.10	14.40	B/1	148.80
S03	1069-7	1943	専用住宅	6.40	7.45	W/1	40.60
S04	1068-6	1941	空家	16.80	9.10	W/1,B	89.20
S05	1068-5	1997	専用住宅	8.54	9.83	B/1	58.47
S06	1068-4	1984	空き店舗/住宅	4.91	10.82	B/1	39.60
S07	1068-2	1978	専用住宅	7.18	11.85	B/1	66.10
S08	1068-1	1973	専用住宅	11.34	10.99	B/2	171.60
S09	1044-2	1943	専用住宅	4.67	7.44	B/2	48.58
S10	1033	1943	食堂/住宅	13.02	12.60	B/1	165.30
S11	1028	1943	専用住宅	12.09	9.05	W/1	74.38
S12	1027-2	1982	雑貨店/住宅	9.52	8.30	B/2	79.40
S13	1024	1943	専用住宅	10.10	8.35	W/2,B	111.30
S14	1023	1943	洗濯屋/住宅	9.06	15.04	W/2,B	39.00
S15	1020	1993	専用住宅	4.15	10.87	B/2	60.48
S16	1020-2	1943	専用住宅	5.84	11.02	W/1	54.20
S17	1005	1981	専用住宅	4.32	17.00	W/1	112.00
S18	1006	1960	空き店舗/住宅	4.43	12.72	W/1	56.19
S19	1007	1970	空き店舗/住宅	4.08	16.52	W/1	50.24
S20	1010	1970	専用住宅	4.26	15.65	W/1	46.20
S21	1000	1965	空き店舗/住宅	14.81	14.99	W/1	162.00
S22	999-1	1945	薬局/住宅	14.87	13.43	W/2	157.00
S23	998-2	1973	貴金属屋/住宅	6.80	6.50	B/2	39.70
S24	996-6	-	美容室/住宅	7.76	12.24	B/2	186.00
S25	999-3/5/7	-	船具店/住宅	5.70	10.60	B/2	-
S26	1000-1	1956	魚屋・食堂/住宅	20.05	23.45	W/2	541.17
N01	1089-30	1974	専用住宅	3.34	4.65	B/1	46.00
N02	1089-12	1975	専用住宅	5.54	9.54	B/1	36.36
N03	1089-28/29	1943	専用住宅	9.33	5.96	W/1	96.19
N04	1089-27	1941	専用住宅	6.95	10.80	W/1	55.20
N05	1089-26	1948	専用住宅	7.02	9.02	W/1	36.40
N06	1089-24	1970	専用住宅	6.22	10.80	B/1	43.20
N07	1089-22	1943	専用住宅	6.70	8.45	W/1	53.88
N08	1089-21	1943	専用住宅	5.50	7.58	W/1	46.28
N09	1089-19/20	1963	専用住宅	7.35	11.30	B/1	60.16
N10	1089-17	1943	専用住宅	5.65	13.84	B/1,W	160.30
N11	1089-15	1966	空家	9.34	8.15	W/2	66.39
N12	1041-2/3	1978	専用住宅	8.39	7.50	B/1,S	27.43
N13	1040-1/1041	1940	写真館/住宅	8.08	18.80	C/2	138.55
N14	1035-11/12	-	鉄物倉庫/住宅	4.18	9.57	W/1	-
N15	1035-7/9	-	専用住宅	2.75	20.85	B/1	-
N16	1034	1980	専用住宅	9.60	15.32	B/1	71.06
N17	1029-2/3	1943	空き店舗/住宅	7.27	14.69	W/1	89.90
N18	1026-29	1979	文房具屋/住宅	4.15	19.04	B/1	13.30
N19	1026-1	1985	営業事務所	4.40	17.71	B/1	27.70
N20	1022	1935	パン屋/住宅	9.20	10.94	C/2	99.20
N21	1021	1943	鉄物店/住宅	6.68	15.68	W/2	97.00
N22	1019	1976	空き店舗/住宅	4.11	23.74	W/2	33.00
N23	1014	1943	空き店舗/住宅	11.07	11.20	W/1	74.38
N24	1009	1977	専用住宅	4.57	9.11	B/2	38.34
N25	1003/1008	1996	美容室/住宅	12.86	9.16	B/1	49.20
N26	998-11/10/14	1993	スーパー/住宅	13.31	17.46	B/1	159.14
N27	1000-2	1980	靴屋/住宅	6.63	7.31	B/2	47.43
N28	1000-42	1945	空家	8.77	9.57	W/2	49.50
N29	1000-76	-	魚屋/住宅	8.31	16.8	W/1	-

※記号-S:南側、N:北側

※構造-W:木造、B:ブロック造、C:コンクリッド造、S:軽量鉄骨造

岸線に湾曲が少なく、河川の河口を中心に形成された集落を言う。

外羅老島の漁村集落は、前島型と河川型が混じった型で、高度100～250mの山地を背後にして、山頂から西北に流れる川と海が直交している沿岸沿いの狭隘地に構成されているのが大きな特徴である。また、港湾周辺の海域の水深が深く、大きな船の出入りが自由にできたため、主要漁港として成長・発展する背景となったのである。

区分	湾型	前島型	河川型	前島型+河川型
立地				
断面				
事例	九龍浦、紺浦など	巨文島	梁山浦、郡山など	外羅老島

図3 漁村集落の立地別類型

2-3 日本人移住漁村の形成過程と発展

記録上、外羅老島で日本人が最初に漁業を始めたのは1894年となっている^{*15}。外羅老島は昔から海老漁業の根拠地として知られており、1903年に岡山県の小野鶴松が最初に移住して干し海老を製造し始め、1906年には同じく岡山県から3戸の漁民が移住して以降、本格的に移住漁村がつくられた。小野は漁業だけではなく、外羅老島の開発のために様々な活動を行ったことで知られる^{*16}。その後、羅老島付近はイシモチと鰻の養魚場として有名となり、漁船と運搬船の一大根拠地として韓国南海岸屈指の日本人移住漁村として発展していくことになった。

1909年の熊本県水産試験場業務工程報告の第3回韓海出漁指導試験では、羅老島の当時の状況を次のように記述している。

“現地、明石町^{*17}に石油発動船、汽船…(中略)…など各出漁船60隻が停泊中であり、飲食店12店などがある。……”^{*18}

以降、1905年の「第2次日韓協約」と1910年の「韓国併合条約」を経て、日本人の移住が増えるとともに沿岸部を埋め立て、近代的な漁港として発展する。1917年の朝鮮総督府の陸地測量部作成の地形図(1:50,000)をみると、現在築亭1区と2区が接する付近に集落が構成されており、この付近を中心として住居地が拡張したと推察される。さらに、上水道と電話を架設し、そして自家発電所を設置して電気を送電するなど他の島嶼地域では前例をみないものであった^{*19}。

ヒアリング調査によると、当時の日本人と韓国人の住み分けは比較的確である。築亭1区と2区の境界を中心として、築亭1区には主に韓国人が、築亭2区には主に日本人が居住ことが明らかである。こうした海岸線沿いの住み分けは他の日本人移住漁村と比べて極めて珍しい^{*20}。

3. 集落の空間構成

日本植民地期につくられた日本人移住漁村の大半はその集落の規模と関係なく、多様な機能的要素を持っているのが大きな特徴である。特に、外羅老島港は韓国の他の著名漁港に比較して、規模(人口、面積など)は極めて小さい漁村であったが、製氷所、製網所、造船所、缶詰工場などの近代的な施設がつくられ、都市的な機能を有する漁業の生産・流通・商業の一大センターであった。

3-1 建物分布

外羅老島の建物は住居、商業施設、公共施設、宗教施設、工業施設の5つに大別される。(図2) 建物の用途に着目してみると、外羅老島は以下のような特徴を持つ。

1) 住居

住居は主に東西方向の旧本町通沿い(漁港の北端部)に密集しており、他には街区内部に点在する程度である。北端部の敷地の住居は狭い路地沿いに肩を寄せるように密集している反面、街区内部に点在する住居は背後の小高い丘の地形に対応して階段状に構成されている。

2) 商業施設

商業施設は主に「L」型の海岸西端部の南北に通る道路に並行して並び、その大半が1階に店舗、2階に住居を持つ店舗併用住宅である。他には漁港の北端部に点在する。その機能としては、スーパー・マーケット、飲食店、魚屋、船具店、雑貨屋、宿泊施設、カラオケ、パン屋、喫茶店、クリーニング屋、薬局などがあり、その中で魚屋と飲食店が商業施設の約5割(商業施設の92戸の内、47戸)を占めている。

3) 公共施設

主要な公共施設としては、面^{*21}事務所(役所)、警察署、郵便局、金融機

関(銀行、相互金庫など)、消防署、医療施設、老人会館、予備軍本部^{*22}、公共倉庫、漁市場などがある。行政機関の大半は集落の入り口である東側に集中している。特に、予備軍本部は新しい面事務所が1987年に建てられて移転するまで面事務所として使われていた。機能は変化したもの、その建築様式は現在も当時のままである。また、郵便局は集落の進入口あたり(調査対象S01)に1910年に開局されたが、1989年に現在の位置に移ったものである。また現存しないが、漁業関連の行政施設として南端部に税関があった。

4) 宗教施設

宗教施設としてはキリスト教会が3つ、仏教寺院が1つある。キリスト教会はそれぞれ西端部の小高い丘、住居地の真中、北の河川の埋込地に位置する。寺院は漁港の東の方に離れたところに設けられた。

一方、現存しないが、集落の背後の小高い丘の上に神明神社^{*23}が造られたという事実がある。当時には小祠であったが、1945年に壊され、神社に登る階段と敷地、そして小祠の基礎の跡だけが残っている。

5) 工業施設

漁港の南端部には工業施設が密集している。その種類としては造船所、製氷所、製網所、缶詰工場、醸造場など、主に漁業関連である。こうした工業施設の密集の背景には流通と商業の発展によって港湾面積が足りなくなり、それまで整備されなかった南端部の磯の部分を埋立てられ、その敷地に建物が集中した経緯がある。

3-2 街区構成と街路体系

現在、外羅老島の街路体系は「L」字型の海岸道路、街区内の、海岸道路に平行する旧海岸道路、そして住居地内部の海岸道路と直交する路地の3つの道路が基盤となっている。日本植民地期当時の街路体系の軸となる街区内の旧海岸道路は、海岸側が埋め立てられて海岸道路がつくられたことによって、裏通り化された経緯がある。特に、屈曲された旧海岸道路とそれに直交してつくられた路地によって、旧本町通に面した街区内の敷地の形態は台形となるという特徴がある^{*24}。旧海岸道路は当時本町通と呼ばれ、集落の主道路であった。

現在、裏通り化された旧本町通の幅は約3～4mで、自動車は通れず、歩行者専用道路のようになっている。また、旧本町通に直行する狭い路地(平均幅約1～3m)の形態は海岸方向には直線であり、山方向へは自然地形をベースとして階段状の曲線である。旧本町通と路地の両側には石でつくられた側溝が現在も残っており、居住地背後の小高い丘から流れてくる水を海に排水している。

街区形態は、方形街区、台形街区、非定形街区の3つに分けられる。方形街区は沿岸部が埋め立てられ、新しい住居地として形成された街区で、格子状となっている。台形街区は、河口と海岸道路に接して比較的平坦な狭隘地に位置し、前述のような台形の敷地が並ぶ形態をとっている。特に、山の迫った狭隘地に形成された台形敷地は非定形住居地と接する場合が多く、部分的に非定形の敷地形態となる。非定形街区は丘陵地に位置し、階段状になることが多く、形態は非定形である。台形街区は集合的な観点からみると、方形街区と同様に連担しており、都市的な居住地形式である。

3-3 居住地構造と街路景観

外羅老島の居住地は東西に流れる河川と海が接したところに直交して形成されており、全体の形は「L」字のように曲がっている。居住地の真中には旧本町通が通り、道路両側に連続して建物が並んでいる。東西につながる河川沿いの道路には主に平屋と2階建ての住宅と店舗が、そして南北に通

図5 街区構成と街路体系

図4 調査対象住宅と町並み

図6 町並みの風景

る沿岸沿いには主に製氷所、製網所、醸造場、缶詰め工場、造船所などの比較的に規模が大きい漁業関連の建物がつくられている。

特に、調査対象地区である東西に走る旧本町通の町並みの規模は現在でも当時と同様に維持されており、住宅と住宅は肩を寄せるように壁を共有した長屋となっているのが特徴である。建物が隙間なく並ぶ街路風景を構成しているのである。また、住宅は平入りが一般的で、全体的に水平的な街路景観を持つ。現在、内部空間よりは外観を改造したものが多く、外壁材料として赤レンガのタイルが数多く用いられている。

4. 居住空間構成とその変容

外羅老島の旧本町通沿いの住宅の平面構成をみると、間口が狭くて奥行きが長い短冊型が一般的である。また住宅の種類からみると、店舗併用住宅より専用住宅が比較的多いという特徴がある(調査対象の55棟の内、28棟)。これは前述のように、旧本町通が裏通り化され、商業が衰退したこと起因するものである。多くの店舗併用住宅が専用住宅に変容されたのである。

4-1 間口による類型

旧本町通沿いの住宅の平面構成に見られる規則性を探るため、調査対象の55棟の分類を試みた。住宅の間取りの基本である柱間を間口に注目してみると、一列型と二列型、そして多列型があり²⁵⁾、その内一列型と二列型が約6割以上(調査対象の55棟の内、38棟)を占めている。それぞれの住宅類型の数は、一列型-14棟、二列型-22棟、多列型(別棟型を含む)-19棟である。その類型を図7に示す。

間口の寸法は、二間(12尺、約3.6m)を基本としている。

一列型は、「二間」を基本とした、三尺の通路あるいは階段を付加する

「二間三尺(15尺、約4.5m)」の構成が一般的であり、内部空間は奥行き方向に部屋が並ぶという単純な構成を取っている。間取りは一列三室を基本とし、「部屋(店舗)-台所-部屋」という極めて単純な構成を取っている。

二列型の間口は、一列型のほぼ2倍に当たる。その寸法を考察してみると、「二間+二間(24尺、約7.2m)」の構成が標準である。全体的な平面構成は①1階に居住空間の中心となる居間が設けられる、②台所やトイレなどの水周り部分は主に敷地の奥の方に設けられるという2つの特徴がある。これらの中には1945年以降に2棟の一列型の住居が統合され、二列型に改造された事例(S12、N12)もある。また、1945年以降に新築された事例にもこのような間取りが多くみられ、狭い間口を持つ敷地の形態に起因するものと推察される。多列型は、三列型が一般的である。2階の構成をみると、二間を基本としているが、他に規則性は見当たらない。また、二列型と同様に一列型と二列型が統合され、三列型となったものがある(S11、S14)。

以上から、間口に注目した類型分類を総合的に考察してみると、①外羅老島の住宅は一列型と二列型が一般的であること、②一列型は一列三室を基本とし、「部屋-台所-部屋」という極めて単純な構成であること、③二列型の平面構成には1階にメイン空間として居間が設けられ、台所やトイレなどの水周り部分は主に敷地の奥の方に設けられる傾向がみられること、という3つの特徴を指摘できる。

4-2 奥行きによる類型

前述のように外羅老島の旧本町通沿いの住宅の平面構成をみると、短冊型が一般的である。こうした短冊型の住宅の空間構成を明らかにするため、その典型的な類型である一列型を対象として奥行き方向の室の構成に焦点を当てると以下ようになる。

一列型の住宅を奥行き方向に並ぶ部屋の数によって分類すると、一列

区分	一列三室型	一列四室型	一列多室型
一 列 型			
事例	S06, S09, S15, N01, N14, N24	S17, S18, N18, N19	S19, S20, N15, N22
二 列 型			
事例	S05, S07, S12, S16, S23, S24, S25, N02, N04, N05, N06, N07, N08, N09, N10, N12, N13, N21, N27, N28, N29	S01, S03, S08, S10, S11, S13, S14, S21, S22, N03, N11, N20, N23, N25, N26	S02, S04, S26, N16

図7 間口と奥行きによる分類

三室型、一列四室型、一列多室型の3つに分けられる。それぞれの数は一列三室型-6棟、一列四室型-3棟、一列多室型-5棟である。

一列三室型は、基本的に「部屋(店舗)-台所-部屋(トイレ)」という極めて単純な構成を取っている(S06, S09, S15, N01, N14, N24)。2階建ての場合には片面に奥行き方向に約3尺(0.9m)の階段を設けており、平面構成は1階とほぼ同様である。一列四室型は一列三室型に1つの室を加えた形で、「部屋(或いは店舗)-部屋-台所-部屋(トイレ)」または「部屋(或いは店舗)-台所-部屋-部屋(トイレ)」という構成が一般的である(S18, N18, N19)。

一列多室型は敷地背後の余地があって増築された場合(S17, S19, S20, N22)と背後に隣接する別の建物と統合された場合(N15)の2つの種類がある。増築や統合によって室の数は五室から七室まで増えるが、いずれにしても室の基本的な構成は一列三室型、一列四室型と変わらない。

4-3 住宅の変容プロセスとその特性

前稿²⁶⁾では、巨文島の日式住宅の増改築に一般的に見られる特徴として平面の拡張、室の統合による店舗面積の拡大、室の個室化の3つをあげ、さらに建物そのものが統合あるいは分離されるプロセスを明らかにした。外羅老島の住宅の増改築に一般的に見られる特徴は、巨文島の場合とあまり変わらない。しかし、外羅老島では2つの統合パターンがみられる。並列して隣接するもの同士で統合される並列統合と背後に接するもの同士で統合される直列統合である。その変容プロセスを図式化し、示すと図8のようになる。

図8 並列統合と直列統合のプロセス

並列統合は一列型が、2列に並んで隣接する壁の一部(特に2室目)をあけて二つの住宅を一つに統合するものである。並列統合には「一列型+一列型→二列型」(S12, N12)と「一列型+二列型→三列型」(S11, S14)、そして「一列型+一列型+一列型→三列型」(N26)という3つの種類がある。間口は「二間+二間(24尺、7.2m)」を基本とし、外観は一つの建物の

ように改造されているが、屋根の形は変わっていない。特に、二つの店舗併用住宅が統合される時、表の一つの店舗は部屋に変わり、一つは店舗として利用される。こうしたことによって店舗から変わった表の部屋には壁がつくられる。

直列統合は背後にある住宅と一つに統合されるもの(N13、N15)で、二つの居住空間を統合するため、その間に台所やトイレなどを設けるという特徴がある。内部空間構成の側面からみると、並列統合の事例より統合度が高く、間取りも比較的变化っていない。

5.まとめ

本稿では、外羅老島の居住地の構造及び住居の空間構成とその変容について以下の点を明らかにした。

①外羅老島の居住地構造は河川と海が接したところに直交して形成されており、全体の形は「L」字形をしており、街路体系は海岸道路、それに平行する街区内の旧海岸道路、そして海岸道路と直交する路地の3つの道路が基盤となっている。

②これによって旧本町通に面した街区内の敷地の形態は台形となるという特徴がある。

③住宅の柱間を間口に着目して分類すると、一列型、二列型、多列型を区別できるが、その内一列型と二列型が一般的である。特に短冊型の典型的な類型である一列型は一列三室型を基本とし、「店舗・台所・部屋」という極めて単純な構成を取っている。

④特に、短冊型は狭い間口を持つ敷地の形態であるため、住宅の変容特性として住居の統合がみられる。住宅の統合には並列統合と直列統合の2つのパターンがみられる。並列統合は2列に並んで隣接する2つの住宅の壁を一部あけて1つに統合するものであり、直列統合は背後の住宅と2つに統合されるものである。

韓半島東海沿岸部に位置する日本人移住漁村に関する考察^{*27}は別稿としたい。また、これまでの研究を踏まえた上で、離れ島、河口、沿岸といった立地別居住地構造、街区構成、居住空間構成とその変容などを比較・考察したい。

注

- *1 日本植民地期における韓国の日本人移住漁村の形成と変容に関する研究は、「日本住文化と韓国住文化」の2つを基軸に着目した文化変容の研究である。本稿は韓国学術進興財団の〈国際協同研究〉課題である「韓国課題名：韓国近代期浦口集落の形成と変容に関する研究」(共同研究者：布野修司・李勲・金泰永、2003年12月～2004年11月)の一環である。
- *2 朴重信・布野修司、日本植民地における韓国の日本人移住漁村の形成に関する研究—巨文島・巨文港を対象として、日本建築学会計画系論文集、第577号、2004.3、pp.105-110
- *3 朴重信・布野修司、日本植民地期における韓国・巨文島の日式住宅の空間構成と変容、日本建築学会計画系論文集、第581号、2004.7、pp.55-60
- *4 主要参考文献は、在京蓬萊面郷友会の「蓬萊(羅老島)」(1988)、高興郡の「村由来誌」(1991)、高興郡史編集委員会の「高興郡史(上・下)」(2000)、清州大学建築工学部留斎建築研究室の「浦口集落实測調査報告書15(蓬萊面・外羅老島)」(2004)などがある。
- *5 日本人移住漁村の主要参考文献としては、吉田敦市の「朝鮮水産発達史」(1954)、孫禎睦の「日帝強占期都市化過程研究」(1996)がある。日式住宅の主要参考文献としては、金泰永の「韓国開港期外人館の建築的特性に関する研究」(1991)、李賢姫

の「韓国にある日式住宅の変遷とその影響に関する研究」(1993)、渋谷猛の「韓国における日本時代の住宅に関する研究—住宅関係法規を資料として」(1989)、川端貢の「朝鮮住宅営団の住宅に関する研究」(1990)などがある。

- *6 当時の海岸道路として、現在も集落の真中を通る主道路である。
- *7 調査対象である東西方向の旧本町通沿いの住宅の数である。
- *8 調査対象住戸はS04、S14、S17、S18、S19、S20、S21、S22、N04、N10、N17、N20、N21、N22の14棟である。
- *9 蓬萊という地名は、この島に蓬(よもぎ)が数多く咲くという意味で名づけられた。
- *10 羅老島の牧場はその周りが30余里(1里=0.4km)で、馬を内羅老島に139匹、外羅老島に119匹を養った。朝鮮英祖時代の記録によると毎年馬64匹と穀草5,000束、そして分譲馬を国に提供していた事実がある。
- *11 ヒアリング調査によると、「羅老島」の表記に「老」を用いたのは、この地域が昔から海老漁業の根拠地であったことに起因する。
- *12 漁業前進基地とは、給水施設、給油施設、共同倉庫、漁業無線局などが設置されており、さらに漁獲物の処理・加工ができる多目的漁港を意味する。韓国では1966年に巨文島、羅老島などの10ヵ所を漁業前進基地として指定している。
- *13 「波市」とはその名前通り、海上で開かれる市場という意味である。盛漁期には各地域から集まった漁民によって船上で直接商売が行われた。
- *14 日本人移住漁村の27ヵ所の集落を対象とし、形態に焦点を当ててみると、湾型、前島型、河川型に区分できる。朴重信・金泰永・李勲、韓国近代期浦口集落の形成過程と類型に関する研究、大韓建築学会春季学術発表大会論文集、2004年4月、pp.543～546
- *15 在京蓬萊面郷友会、蓬萊(羅老島)、1988、pp.99-101
- *16 当時、小野が死んでから神明神社の鏡内に功碑を立ててその業績を表した。清州大学建築工学部留斎建築研究室、浦口集落实測調査報告書15(蓬萊面・外羅老島)、2004年8月、pp.12
- *17 当時のこの地域の町名である。
- *18 吉田敦一、朝鮮水産発達史、朝水会、1954、pp.269-270
- *19 在京蓬萊面郷友会、前掲書、pp.95-101
- *20 日本人移住漁村の韓国人と日本人の住み分けを考察すると、主に海岸線沿いには日本人が、小高い丘には韓国人が居住することが一般的である。
- *21 韓国における行政区画の単位で、日本の「村」に当る。
- *22 予備軍本部とは地域を防御するための地域守備隊(軍隊)の本部を言う。
- *23 ヒアリング調査によると、祭神として天照大御神を祭り、祭は毎年1月に行われた。1940年頃に建てられたが、5年後の1945年に壊された経緯がある。
- *24 朴重信・布野修司、前掲論文(第577号、第581号)
- *25 朴重信・布野修司、前掲論文(第581号)
- *26 朴重信・布野修司、前掲論文(第581号)
- *27 朴重信・布野修司、日本植民地期における韓国の日本人移住漁村について—その3：九龍浦(グリュンボ)の事例、日本建築学会大会学術講演梗概集、2004年8月、pp.709～710

主要参考文献

- [1] 吉田敦市、朝鮮水産発達史、朝水会、1954年
- [2] 孫禎睦、日帝強占期都市化過程研究、一誌社、1996年
- [3] 清州大学建築工学部留斎建築研究室、浦口集落实測調査報告書15(蓬萊面・外羅老島)、2004年8月
- [4] 在京蓬萊面郷友会、蓬萊(羅老島)、在京蓬萊面郷友会、1988年
- [5] 高興郡史編集委員会、高興郡史(上・下)、高興郡史編集委員会、2000年
- [6] 姜京男・金泰永、日本人移住漁村内一列型家屋の変容に関する研究—外羅老島の築亭1・2区を対象として、大韓建築学会秋季学術発表大会論文集、通巻24号・第2号、2004年10月、pp.773-776
- [7] 朝鮮総督府、朝鮮の聚落(前・中・後編)、朝鮮総督府、1933年
- [8] 李賢姫、韓国にある日式住宅の変遷とその影響に関する研究、漢陽大、1993年
- [9] 都市住居研究会、異文化の葛藤と同化—韓国における「日式住宅」、建築資料研究社、1998年
- [10] 安藤亮・近藤健雄、みなとまちの空間構成に関する研究、日本建築学会学術講演梗概集(E-2)、1996年、pp.453-454

(2004年12月10日原稿受理、2005年5月29日採用決定)